真理通信

第 90 号　平成 28 年（2016 年）3 月 1 日発行

巻頭

華の香（か）は　風にさからいては行かず
栴檀（せんだん）も多掲羅（たがら）も　末利迦（まりか）もまた然（しか）り
されど　善人（よきひと）の香（かおり）は　風にさからいつつもゆく
善き士（ひと）の徳（ちから）は　すべての方（かた）に薫（かお）る
（法句経　54）

◇新：法句経講義４８◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

美しい花々が咲く春の訪れです。でも、どんなに香りの強い花でも、その香りは風にさえぎられてしまいます。遠くからは、その香りを嗅ぐことはできません。でも、善き人の香りは、風があっても、遠くまで多くの人々に届きます。

先日、知り合いの幼稚園の園長先生が亡くなりました。51歳という働き盛りでした。その先生とは、研修会で知り合ったのですが、本当に穏やかで、いつもニコニコ顔で、素晴らしいお人柄でした。さらに驚かされたことは、その先生は幼児教育の創始者F・フレーベルの著作を、原書（古いドイツ語）で読んでおられたのです。

今、日本の大学で幼児教育を教えている先生で、原書でフレーベルが読める人読んだ人が、一体何人いるでしょう。そんな園長先生が、幼稚園の現場で、一所懸命働いておられたのです。子ども達が大好きで、病床で一日も早い職場復帰を願っておられたのです。

お通夜には、大変な数の人が集まっていました。善き人の香りが、深い悲しみのなか、静かに流れていました。その香りを、いつまでも忘れないように、心に刻んだ夜でした。

仏教豆知識　68	南無

南無（なむ）は、サンスクリット語の namas、namo を音写したもので、敬意を表すること帰依することを意味します。南無阿弥陀仏（阿弥陀仏に帰依すること）、南無妙法蓮華経　（法華経に帰依すること）、南無三宝（仏・法・僧の三宝に帰依すること）などと使われます。南無という字には意味がなく、納莫（のうまく）と音写されることもあります。危ない場面で、南無三（なむさん）と言うのは、南無三宝の略。ナンマイダは、南無阿弥陀仏が略されたものです。

＜　*主管所感*　＞

そこにあること　　友松浩志

昔、水戸の先の久慈浜の海岸を訪れたことがあります。茨城の海岸は、福島原発の影響が心配されましたが、今は静かで平穏な海岸です。

なぜそこに行ったのかというと、父方の親戚があったからです。その家は、海岸近くで薬局をやっていました。その時、父が「薬局っていいですね。許可がいるから近くに商売がたきができなくて」と言いました。でもその事情は、その後大きく変わったようです。

大型のドラッグストアーがあちこちにつくられ、コンビニの薬局まで出現しています。

「薬局がいい仕事」などととても言える状態ではないようです。ところが、最近「かかりつけ薬剤師」という話が登場してきました。どこの家でも、病院の薬が残ってだぶついています。それはすべて、税金が投入されたものです。薬品の管理を、身近な薬剤師にまかせる。かつての「地元の薬局」が、活用される時代もくるかも知れません。

規制緩和、グローバル化の波は、保育・教育の世界にも押し寄せています。待機児対策の名のもとに、都会では膨大な数の保育施設（？）がつくられています。そこに、大手の株式会社まで進出しています。確かに、業者の保育施設は、便利かも知れません。利用者　（大概それは親をさします）本位につくられた施設では、昔のように親が説教されることもないでしょう。でもそうした施設は、本来の利用者である「子ども」にとって、どんな施設なのでしょう。

神田寺幼稚園も、真理学園幼稚園も、子ども達のためにつくられた施設です。利用者は子ども達です。もちろん、お父さんやお母さんにとっても、役に立つ施設であろうと努力してきました。でも何より、地元に根ざして、そこで育った人がいつでも帰って来られる場所として、そこにあること、それが目標です。

大型化、グローバル化の時代、それは不安の時代でもあります。だから少子化なのかも知れません。安心して暮らせる、安心して育てられる、そんな時代のために、小さな薬局のように、小さな努力を重ねていきたいと思います。

◆*元日修正会に集う*◆

今年も、元日午後 2 時から修正会（しゅしょうえ）を行ないました。仏教聖歌を歌った後、勤行式を声を合わせて読誦。その後、主管から「因縁正受」という、いただいた縁を大切に生きるというお話がありました。

法話のあと、記念撮影があり、甘酒やお菓子で歓談。発願録（ほつがんろく）に新年の抱負を記入して、そろって新年が平和で安らかな年であることをお祈りしました。

真理通信

第 91 号　平成 28 年（2016 年）7 月 1 日発行

巻頭

欲に著(じゃく)する人は　蜘蛛(くも)がおのれの作れる
網(あみ)にそいゆくがごとく
自らつくれる　欲の流れにそいゆくなり
されば　賢き人々は　これを断ちきり
あらゆる苦悩(くるしみ)をすて　欲なくして去る
(法句経　347)

◇新：法句経講義４９◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

公用車で別荘通いをしていた知事も、覚醒剤に溺れた元野球選手も、自分が作った「欲の網」から逃れられなかった人たちです。愚かと言えば愚か、でも誰でも「欲の網」というのは、知らぬ間に作っているものです。

賭けごとに溺れて大きな借金をつくった人、仲が良かったのに遺産相続でバラバラになった兄弟、そんな例は身近にもたくさんあるものです。人は、自分で作った「欲の網」にそってしか、生きる方法がない生物のようです。それは、あの 「くもの巣」を行き来する蜘蛛のようです。

法句経には、賢い人は、その「欲の網」を断ち切る－とあります。それは習慣となった薬をやめる位、大変なことです。蜘蛛が、自分で作った「くもの巣」を切ってしまえば、下へストンと落ちるしかありません。その勇気があるのか。

欲を断ち切るには勇気がいります。でも、もし、欲を断ち切ることが出来れば、そこには大きな開放があるはずです。苦しみから脱した、自由がある。それを、「解説」(げだつ)といいます。「解脱」に達するには、犠牲も必要になる。そのうえで、静かに去っていく、最高の境地に導かれるのです。

仏教豆知識　69	安居

安居(あんご)というのは、雨の季節に一定の場所に集まって、外出せずに勉強や修行に励むことを言います。インドの雨期は春から夏にかけて3ヶ月と長く、また外出すると、草木や虫を踏んで殺してしまう恐れがあるので、こうした制度が生まれたと言われます。

安居に入ることを結夏(けちげ)、終えることを解夏(げげ)と言い、その間は絶好の研讃期間とされ、読経、写経、講義、討論などが行われました。安居は、夏安居(げあんご)、雨安居(うあんご)とも言い、禅宗では江湖会(ごうこえ)とも言われました。また、僧侶の経験年数を、安居の回数で数えたとも言われます。

＜　*主管所感*　＞

家族をつくる　　友松 浩志

ある会合で、たまたま隣に座った婦人との会話。「本当に、この頃の若い人は、なぜ結婚しないんでしょうね。」　私自身、婚期がきわめて遅かったので、一応話題を合わせて。「結婚で言うのは、一種のショック体験ですね。異文化体験。だって、食べるものも、物の見方も違う２人が、一緒に暮らすわけでしょ。」「なるほど、ショック体験ね。」　少子化の原因は、若者が結婚しないから、というのが定説になりつつある。結婚しなくても子どもを増やしていいなら、といって日本はまだ「家族」が社会の構成単位だから、そう簡単にはいかない。「家族という病」などという本が売れ始めると、なおさら、結婚から気持ちが遠のいていく。

昔、大学の山岳会に入った頃、一番気が重かったのは、ベチャベチャのご飯を食べなくてはならなかったこと。山での食事は自分たちで作るわけで、米の水加減で言い争いになる。水をたっぷり入れて柔らかく炊く、その水加減に我慢がならなかった。私か固く炊くと、先輩からも同僚からも「こんなガンタ飯食えるか」と叱責が飛ぶ。まさに、異文化体験。何日も柔らか飯を食べ続け、一応順応はしたけれど、やはり私はコワ飯派である。

人はいろんな文化で育てられる。結婚は、自分以外の文化を知る、絶好の機会だ。結婚すると、自分が少し大きくなる。そして家族をつくる。家族を悪く言う人もいるけれど、家族というのは、ともに「歴史」をつくる仲間だと思う。かけがえのない自分の歴史を、一緒につくっていく人たちだ。

確かに、家族といえども、他人の集団である。分かる部分もあれば、分からない部分もある。北海道の森の中で行方不明になった子どもだって、どこへ行ったか、親にさえ分からなかった。でも、家族は一緒に歴史をつくる。忘れられない、一番大切な歴史をつくる人たち。それが家族だと思う。

◆*花まつりをお祝いして*◆

お釈迦様のお誕生日を「花まつり」と呼ぶようになったのは、明治の初め、仏教の再生を願った命名だったようです。（それまでは「仏生会」「降誕会」等と言われました。）神田寺では、現在地に創建以来、毎年「花まつり」を実施しています。以前は、くじ引きプレゼント大会などを盛大に行っていましたが、現在は白象パレードを中心に、花御堂の灌仏（甘茶がけ）などを行っています。今年の「花まつり」は、晴天に恵まれて、秋葉原の街を、幼稚園の子ども達が元気に白象の山車を引いて歩きました。真理学園幼稚園でも５月に花御堂をつくり、灌仏を行いました。また、甘茶もいただいてお釈迦様のお誕生をお祝いしました。

真理通信

第 92 号　平成 28 年（2016 年）12 月 1 日発行

巻頭

自ら慚（はじ）をもちて　おのれを制し
ひとのそしりを　意とせざること
良き馬の　鞭（むち）を意とせざるがごとき
かくのごときのひと
この世に多くあらんや

（法句経　143　B）

◇新：法句経講義５０◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

人は誰でも失敗するものです。恥をかくものです。生きるってことは、恥の上塗りをし続けることみたいに感じることがあります。

でも、問題はその後です。失敗して、周りからあれこれ言われ、がっかりし、そのうえで、どうするか、が問題です。自暴自棄になるか、それともその失敗を次に生かせるか。「おのれを制し、ひとのそしりを、意とせざること」が出来るかどうか。

そこには、強い意思が必要です。じっくりと、自分と向き合うことが必要です。何かいけなかったのか、多くの場合、原因はたいがい自分のなかにあるものです。そして、それに気づくことは、なかなか大変なことです。

周囲は、いろいろ勝手なことを言うものです。もちろん、善意で言ってくれているものもあるでしょう。でも、問題は自分自身なのです。意見は意見として聞くけれど、自分が改まらなければ、何も変わりはしない。

鞭を打たれた馬のように、泰然と前を向いて進んでいく、そんな人になれたら素晴らしいことです。

仏教豆知識　70	煩悩

煩悩（ぼんのう）とは、心の汚れを言います。貪（とん：むさぼり）、瞋（じん：いかり）、痴（ち：おろかさ）の三つが根源的な煩悩とされ、三毒（さんどく）と言われます。毎年大晦日の夜、百八の煩悩を除く「除夜の鐘」をたたきますが、百八というのは、たくさんという意味です。

人は本来清浄で、煩悩はたまたま付着した塵のようなもの、と考える客塵煩悩（きゃくじんぼんのう）という考え方があります。また、煩悩即菩提（ぼんのうそくぼだい）煩悩を持つ身こそ本来の自分であり、そこから悟りがひらかれるという考え方も生まれました。「煩悩の氷多ければ悟りの水多し」とは、親鸞上人の有名な教えです。

＜　*主管所感*　＞

長く見つめていられない　　友松　浩志

年の瀬になると、新聞に、今年亡くなった有名な人の追悼記事がのります。アーあの人も今年亡くなったんだ、と思うと、うら寂しくなります。人は、誰でも去っていくもの。有名な人だけでなく、言うまでもなく、どんな人でも去っていきます。自分自身もやがて去っていく。

でも人は、四六時中「死」と向き合ってはいられません。ある人が、「死と太陽は長く見つめていられない」と言っていましたが、ずっと死のことを考えていたら、頭がおかしくなってしまいます。何か、他のことを考えようとする。青少年時代に、死が怖くて不安になったり、泣いた経験がある方もおありでしょう。そうした不安は、日常の生活のなかに徐々にまぎらわせていったはずです。肉親の死のあとの虚脱感も、葬儀の段取りや来客の接待のうちに、落ち着かせていった。そんな経験がある方も多いはずです。

今年 7 月に亡くなった永　六輔氏が、ある本で「父が死んだ時は、悲しかった。母が死んだ時は、虚しかった。悲しさには耐えられたが、虚しさは耐えがたかった。」と書いておられました。肉親の死は、大きなショックです。

来年、母の 33 回忌がやってきます。 33 回忌というのは、大きな節目の回忌と言われて、地方によっては、位牌を菩提寺に返すと聞いたことがあります。人生 50 年の時代、33 回忌以後の法要は、なかなか難しかったのでしょう。そんな 32 年前のことですが、私にとっても、母の死は、悲しいというよりも虚しいものでした。もう、自分の死が「仮定の死」ではなく、現実にとなりにあるものになったし、何より生きる支えが取れてしまったように思われたものです。

とはいえ、「母の死」の後、見え隠れする死を感じながら、以前よりも前を見て生きるようになったようにも思います。「長く見つめていられない」が故に、死は時に私たちを励まし勇気づけてくれるのかも知れません。

（下へ続く）

◆*秋／ともに歩む楽しさ*◆

－遊行会・柴又から矢切へ－

一年ぶりの遊行会（ゆぎょうえ）を 11 月 14 日に行ないました。今回は、東京の東端、葛飾区の柴又、あの寅さんの故郷です。神田寺から小型バスで柴又へ。

まず、帝釈天を参拝。帝釈天の本堂外壁には、素晴らしい彫刻がほどこされています。また立派な庭園もあり、ゆっくり鑑賞。寅さんの記念館では、再現された映画のセットに目をうばわれました。昼食は、有名な川甚で川魚料理を堪能。当日は曇空無風で、運よく矢切の渡しに乗船し千葉県へ。対岸で待っていたバスで回向院別院へ。ここには、江東区深川の震災・戦災で犠牲になった方々の合同墓があり、参拝。その後、別院内の喫茶室でしばらく歓談し帰路につきました。ゆったりと、静かな秋にふれた一日でした。

△帝釈天の本堂前で記念撮影をしました。

◆寄贈された少女像◆

今年の 5 月から、神田寺の応接室に一体の少女像が展示されています。これは、檀家の宮下英次氏が寄贈して下さったもので、元・日展理事長、文化功労者の橋本堅太郎氏の作品です。この作品は、長く宮下家に所蔵されていましたが、昨年、先々代圓諦住職の法要の際、講師の石上善応先生が、戦後の神田寺での橋本先生との出会いなど語られたことから、この作品は神田寺で保管して欲しいと思いたたれたものです。

現在、日本を代表する彫刻界の重鎮・橋本氏の青年時代の清々しい作品です。是非ご覧下さい。